

佳作

おじいちゃんのおぢくの実

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校六年 宮脇 ひまり

「ただいまー。」

今日は家族で大分のおばあちゃんの家にお墓参りに行きました。私が走ってかけよると、おばあちゃんニコニコしながら、

「こっちこっちー！」

と手をふっていました。おばあちゃんの家は、げん関の前に大きな坂があります。少し先から助走をつけて坂を上るのが私の楽しみです。坂を一気に上ると右手に大きないちじくの木があります。私の背よりずっと高く、一番背の高いお兄ちゃんが背のびをしても、一番上のいちじくの実は採れません。おばあちゃんが、

「いくらでも採っていいから、たくさん持って帰ってね。」

と言って、先のがったハサミと大きなビニールぶ

くろをわたしてくれました。いちじくの木は私が小さい時からあって、夏になると毎年たくさんの実をつけてくれます。おぼんの帰省の時は、いつもお兄ちゃんどっちが大きないちじくを採れるのか勝負するのが私の楽しみです。

「よいドン！」

お兄ちゃんは横目で私を見ながら、

「やったー！」

と上の方にある実を採って自まんそうにしています。いちじくの先っぱの方をハサミで切ると、中からじゅわっと白いしるが出てきます。おばあちゃん、

「白いしるをさわるとベタベタしてかゆくなるから、気をつけてね。」

と声をかけてくれました。お兄ちゃんと二人で採ったいちじくをおじいちゃんのお仏さんにお供えに行きました。おじいちゃんは私が二才の時に亡くなったので、私はおじいちゃんの写真を見てもあまり記憶がありません。後ろからおばあちゃんが来て、

「きつとおじいちゃん、たくさん採ってくれて喜んでるよ。だってこのいちじくはおじいちゃんのおぢくだからね。」

と話してくれました。おじいちゃんは、私が生まれた年にこのいちじくの木を植えたそうです。

「おじいちゃんはいちじくの実がなる前に病気で亡くなってしまったけれど、二人と一しょにいちじくを採るのを楽しみにしてたんだよ。亡くなった次の年からたくさんのおぢくの実ができるようになったから、きっと天国のおじいちゃんが二人に食べてもらうためにプレゼントしてるんだよ。」と教えてくれました。私はこのあまくて美味しいいちじくを食べるとおじいちゃんを思い出して、心が温かくなりました。毎年近所の人達でいちじくを食べながら、おじいちゃんのお話をするそうです。おじいちゃんは、今もみんなの心を温かくしてくれていると思います。来年も、おじいちゃんのおぢくを食べたいです。ありがとう、おじいちゃん。」